

言葉遊び・漢字パズル

■ 今回のポイント

- ① 日常生活の中に使われている言葉遊びに気づく
- ② 言葉遊びの種類や方法を知り、表現の質を高める
- ③ さまざまな言葉による遊びや創作を自分でもやってみる

■ 今回の言語活動

「ウォーミングアップ ～お題しりとり～」

「アクロスティック (acrostic) / 折り句」に挑戦

「漢字パズルを解いてみよう」

「文をつないで物語を作る」

【ポイント】

今回は「お題しりとり」というウォーミングアップから、「アクロスティック (折り句)」の創作、「漢字パズル」、「ちよつとずつストーリー」という言語活動を扱います。

「しりとり」は誰もがよく知っている言葉遊びの一つです。しかし、「お題」が決められ、特定のテーマに関連する言葉でしかつないではいけないというルールがあると、急に難易度が高まります。こういう遊びは、「楽しく習う」＝「楽習」(がくしゅう)として、豊富な語彙の獲得へと確実につながっている大切な学びといえます。

「アクロスティック」は「折り句」と呼ばれる伝統的な修辞法です。行頭や行間・行末などに、つないで読むと意味をもつ単語や文を折り込みます。今回、番組で例として取り上げたのは『伊勢物語』に登場する折り句です。「男」が「三河国(今の愛知県)」にさしかかると「杜若」(古くは「かきつはた」とも言われた)が咲いているのを見つけ、その花の名前を折り込んで、京の都に置いてきた妻と長くなったこの旅を詠んでみせます。

国語監修・執筆

齋藤 祐

〈か〉らころも 〈き〉つつつなれにし 〈つ〉ましあれば
 〈は〉るばるきぬる 〈た〉びをしぞおもふ

漢字にすると次のようになります。

唐衣からんぎも 着かつつなれにし 妻つましあれば
 はるばるきぬる 旅りをしぞ思おもふ

さらに、言葉を補って意識すると次のようになります。

「何度も着て身になじんだ唐衣のように、長年なれ親しんだ妻が都にいたので、その妻を残したままはるばる来てしまった旅のわびしさが、この花を見ることによつてしみじみと感じられます。」

旅先で見つけた花から連想して奥行きのある世界が詠まれているのがわかります。

さて、アクロスティックは、詩の中にどんな言葉を折り込んでもよいのですが、詠まれた詩の内容と折り込まれた言葉との間にどのようなつながりを設けるかによつて、鑑賞者への届き方が変わります。どんな言葉を・どこに・どう折り込むか、というの腕の見せどころです。

番組で紹介する「漢字パズル」では、ちよつと変わった出題をします。四角の中にいくつかの線が引かれた図形を用意し、その中に隠れている漢字を決められた時間の中でどのくらい探すことができるか、というものです。これは「表意文字」と呼ばれる漢字ならではの遊びで、さまざまな線の組み合わせでできている漢字の特徴をつかまえることができます。

「ちよつとずつストロリー」は、ひとりが少しだけ言葉をつむぎ、別の人がそれに付け加える形で文を成立させ、ちよつとずつストロリーを立ち上げていくという活動です。自分の言葉を事前に用意しておくことができないので、前の人の言葉に耳を傾けながら、反射的に、かつ、意味のある続きを考えなければいけません。そうすると、ひとりずつが提示する言葉は断片としての点にすぎないのに、それぞれの言葉をつないでみることによつて徐々に線としての物語が見えてきます。みんなで協力して文脈を構成していく、というところにおもしろさがあります。

◆今回のまとめ

言葉遊びや漢字パズルは、それ自体をゲームとして楽しむことができる一方、参加者が言葉に対して抱いているイメージを豊かにふくらませることができるといふ効用があります。言葉のセンスを磨いて表現力を高めてくれるのです。

言葉は私たちを取り囲む日常の道具であるだけでなく、これまでとは違った世界を私たちに見せてくれます。これらを武器として使いこなし、自分の言語観のバージョンアップを目指しましょう。